



新規侵入害虫 ツマジロクサヨトウに 対する各種殺虫剤の 効果を検証



写真1 ツマジロクサヨトウ幼虫

ツマジロクサヨトウは、南北アメリカ原産の害虫で、2016年にアフリカ大陸で発生が確認され、トウモロコシを中心に大きな被害をもたらした（写真1）。2018年にはインドなどの南アジア、2019年には中国でも発生が確認され、日本では2019年6月27日に鹿児島県で初確認され、2019年末までに青森県を北限とする複数の府県で確認された。原産国では多くの作物を加害するとされているが、国内では飼料用トウモロコシ、スイートコーン、飼料用ソルガム、さとうきび、もちきびで被害が確認されている（写真2）。

ツマジロクサヨトウの防除対策

ツマジロクサヨトウは、休眠性を持たず、冬季の気温が低い地域では越冬できないとされるが、中国南部や台湾、沖縄県では越冬する可能性が高い。飛来分散性が極めて高いことから、2020年7月現在で、2019年7月時点よりも広範囲への侵入が確認されつつある。迅速に適切な防除を実施しなければ大きな被害をもたらす可能性がある。

ツマジロクサヨトウの防除に際し、2020年7月現在、本種に対する登録のある農薬は存在しないが、農林水産省は植物防疫法第29条第1項の規

定により、対象作物においてハスモンヨトウやメイチュウ類などに適用のある農薬を使用して防除を行うことを認めている。

ツマジロクサヨトウに対する各種殺虫剤の効果についての知見がないため、全農農薬研究室では、トウモロコシの葉を用いてツマジロクサヨトウ初齢幼虫に対する各種殺虫剤の効果を検証した（表）。なお、本試験に用いたツマジロクサヨトウは農林水産省消費・安全局植物防疫課に許可を受け管理した。その結果、効果が認められた薬剤は、スミチオン乳剤、プリンスフロアブル、ディア



写真2 ツマジロクサヨトウに食害されたトウモロコシ

ナSC、アニキ乳剤、アフーム乳剤、コテツフロアブル、パダンSG水溶剤、カスケード乳剤、アクセルフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、ベネビアOD、パーマチオン水和剤、キックオフ顆粒水和剤、プレオフロアブルであった。

今回、初齢幼虫に効果が認められた薬剤についても、ツマジロクサヨトウの成長にともなって効果が下がると考えられるため、早期防除の徹底が必要である。

全農は、本試験の結果が2020年のツマジロクサヨトウ防除対策の一助になることを期待している。

全農は、本試験の結果が2020年のツマジロクサヨトウ防除対策の一助になることを期待している。

【全農 営農・技術センター 農薬研究室】

表 ツマジロクサヨトウ初齢幼虫に対して常用濃度で効果が認められた薬剤と適用内容

RACコード	薬剤 ^{*1}	常用濃度	使用可能 ^{*2}						
			飼料用トウモロコシ	未成熟トウモロコシ	トウモロコシ(子実)	サトウキビ	水稻	さつまいも	花き類・観葉植物
1B	スミチオン乳剤	1,000倍	○	○	○	○	○		
2B	プリンスフロアブル	2,000倍		○					
5	ディアナSC	4,000倍					○		
6	アニキ乳剤	1,000倍		○				○	
6	アフーム乳剤	1,000倍		○	○			○	
13	コテツフロアブル	2,000倍		○	○			○	○(ただし、キク、ストックを除く)
14	パダンSG水溶剤	1,000倍	○	○	○				
15	カスケード乳剤	2,000倍		○				○	
22B	アクセルフロアブル	1,000倍		○	○			○	○(ただし、キクを除く)
28	フェニックス顆粒水和剤	2,000倍		○	○			○	○(ただし、キク、リンドウを除く)
28	プレバソンフロアブル5	2,000倍		○	○	○		○	
28	ベネビアOD	4,000倍		○	○			○	
3A+1B	パーマチオン水和剤	2,000倍		○	○				
28+4A	キックオフ顆粒水和剤	1,000倍				○			
UN	プレオフロアブル	1,000倍		○				○	○

*1：常用濃度で80%以上の補正死虫率となった薬剤をリストアップした

*2：植物防疫法第29条第1項の規定に従い、農林水産省が散布可能と通知のあった作物との組み合わせを○とした